

採用案内  
RECRUIT GUIDE

中小企業とともに  
東京の未来を描こう

地方独立行政法人  
東京都立産業技術研究センター

本部

〒135-0064 東京都江東区青海2-4-10  
TEL: 03-5530-2762 (採用担当)

多摩テクノプラザ

〒196-0033 東京都昭島市東町3-6-1  
TEL: 042-500-2300

墨田支所

〒130-0015 東京都墨田区横網1-6-1 KFCビル12階  
TEL: 03-3624-3731

食品技術センター

〒101-0025 東京都千代田区神田佐久間町1-9  
東京都産業労働局秋葉原庁舎 6階～8階  
TEL: 03-5256-9251



都産技研採用サイト



東京都内の企業のうち、98%以上が中小企業。  
その数は、約41万9千社にのぼります（※2021年時点）

それはつまり、  
41万9千通りの夢があり、  
41万9千通りの願いがあり、  
41万9千通りの未来があるということ。

その一つ一つに真摯に向き合い、  
すべての人々の暮らしに貢献することが、  
私たち都産技研の使命です。

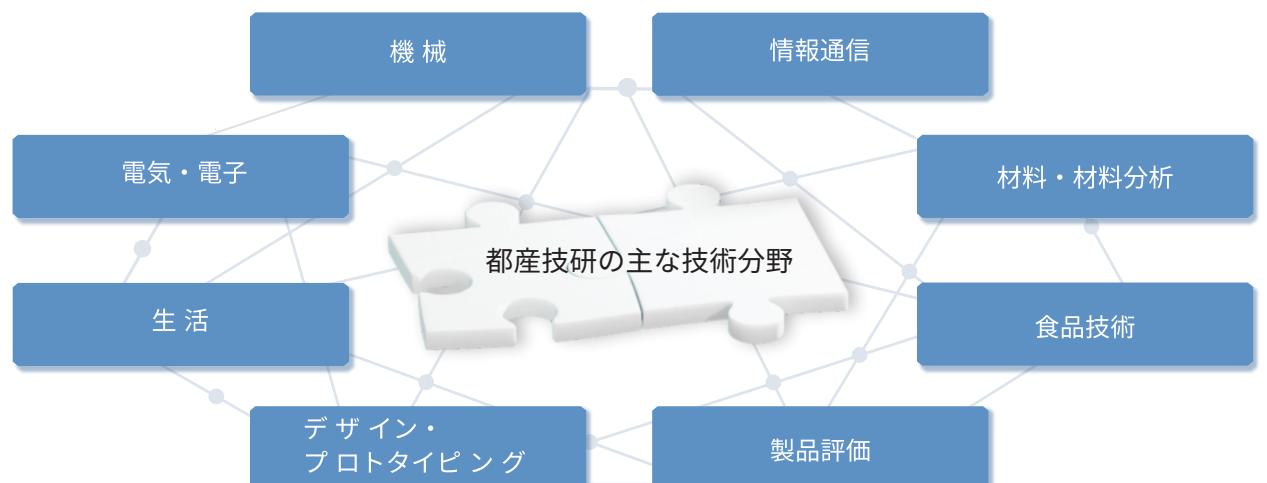
41万9千通りの夢を、  
私たちの技術でつなぎ、東京の未来予想図を描く。

その営みが、中小企業の未来を照らすと信じています。

ぜひ私たちと一緒に、東京の「未来」を創りませんか？

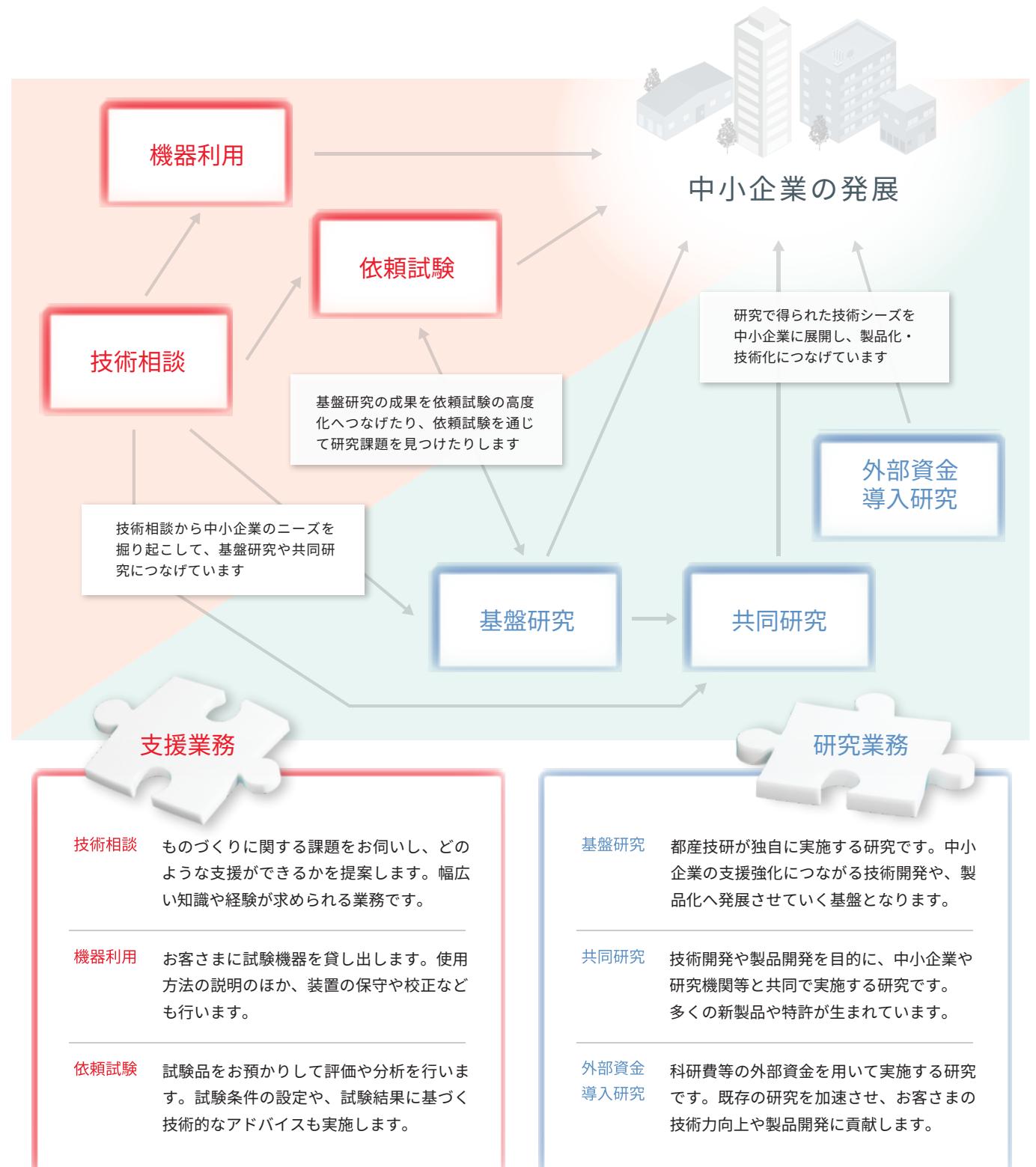
## 都産技研とは

都産技研は、東京都が設置した公設試験研究機関です。  
都内中小企業の技術的な課題を解決するため、試験・分析、技術相談、研究開発などを通じて支援を行っています。ものづくりの現場に寄り添い、技術の力で企業の成長と都民の暮らしの向上に貢献しています。



## 研究員の仕事

都産技研の研究員の仕事は、大きく分けて「支援業務」と「研究業務」の2つ。一見別々に見えるこの2つの業務ですが、実は深くつながっていて、両輪で取り組むことで大きな相乗効果を生み出しています。例えば、技術相談を通じて中小企業のニーズを掘り起こし、それをヒントに新たな研究テーマを立ち上げることもあります。逆に、研究で得た知見を現場にフィードバックし、試験の高度化につなげています。研究員一人一人がこの2つの業務を行うことで、中小企業に寄り添った実践的な支援が可能になり、新しい製品や革新的な技術の創出にもつながっています。「研究」と「支援」の両方に関わるからこそ、ものづくりの現場に本当に役立つ技術が生まれる—それが、都産技研の研究員の仕事です。



突き詰める面白さ  
自分の研究が  
誰かの役に立つ面白さと、



INTERVIEW

## 新たな分野への挑戦が成長につながる

学生時代は、ガラス繊維強化プラスチック（GFRP）の機械特性評価を研究テーマにしていました。当初は樹脂メーカーへの就職も検討していましたが、都産技研の就職説明会で具体的な業務内容を聞き、充実した研究設備や、研究成果が中小企業の課題解決に直接つながる点に強くひかれ、第一志望となりました。

内定後に自身の専門性や採用後の希望を役員と話す機会があり、その面談での内容を踏まえて、化学分野の研究員が多い「マテリアル技術グループ」への配属が決まりました。より学生時代の専攻に近い部署もあったのですが、現在の部

署では材料を含む幅広い分野に挑戦できる上、他部門との連携も多く、結果的に自身の成長につながっていると実感しています。

配属後のOJT研修ではチーフから技術相談の対応や試験の方法などを丁寧に教えてもらい、徐々に業務に慣れてきました。もともと機械分野が専門なので、化学分野に関してはわからないことも多かったのですが、先輩たちのサポートや外部研修の受講を通じて、新たな知識を積極的に吸収しています。

### 一日のスケジュール



9:00 出勤 メールの確認や返信  
10:00 樹脂メーカーのお客さまから開発を進められているプラスチック材料の評価に関する技術相談を受け、試験方法を提案  
11:00 共同研究の進捗を上司に報告して、今後の進め方を相談  
12:00 昼休み  
13:00 共同研究のために作ったサンプルで強度試験を行い、結果を分析  
17:45 退勤

## 1年目で基盤研究を立ち上げ、恩師との共同研究へ

現在は、高分子材料に関する依頼試験や機器利用などの支援業務を行っています。お客さまは樹脂や成形メーカーが中心で、新規開発されたプラスチック材料の分析や、不良品の解析、射出成形機の利用など、プラスチック全般の依頼に対応しています。学生時代に学んだFRP関連の知識を活かすことができる場面が多く、やりがいを感じています。

支援業務と並行して、入所1年目には「GFRPの不燃化」をテーマに基盤研究\*を立ち上げました。燃えやすい性質を持つプラスチックに難燃性を持たせるには添加剤の使用が一般的ですが、環境規制の強化により、より安全で持続可能な材料の開発が求められています。そこでGFRPをベースに、難燃性や成形性を兼ね備えた材料を追求しようと考えました。

入所前から「安価で製造も容易なGFRPは中小企業支援にも活かせるのではないか」と研究の構想はありました。基盤研究のテーマ提出は毎年5月に行われる所以、入所後すぐに環境問題やFRP業界の情勢を調査するなど、入念に準備を行いました。

この基盤研究は、2年目から企業・大学・都産技研の三者による共同研究に発展し、現在進行形でGFRPの不燃化に取り組んでいます。実は、私の出身大学の恩師もこの共同研究に参画しています。社会人として、恩師と対等に研究ができるということに、大きな喜びと誇りを感じています。

\*基盤研究：都産技研が独自に計画し実施する研究です。中小企業の技術支援強化につながる技術開発や、共同研究および外部資金研究に発展させていくための基盤となる研究開発に取り組んでいます。

## 日々成長を感じられる環境でさらにステップアップしていきたい

大学と違い、都産技研では製品化・量産化を視野に入れたより実践的な研究が求められます。支援業務においても、コストや効率を重視した提案を行っていく必要があります。当初は学生時代との違いに戸惑うこともありましたが、お客さまとのコミュニケーションを通じて、製造工程や要求性能について理解を深めていきました。今では化学の知識も着実に身につき、試験の提案ができるようになるなど、日々成長を感じています。お客さまから感謝の声をいただくと、この仕事を選んで本当によかったと感じます。

研究業務においても、予想通りの結果を得ることができたときはもちろん、予想外の結果が出たときに「なぜ？」と考え

れる時間がとても楽しいです。今後は、現在の共同研究をさらに発展させるとともに、新たな研究テーマにも挑戦したいと考えています。また、大学院博士課程社会人入学派遣研修制度を利用して博士号の取得も目指しています。自分の研究が誰かの役に立つ面白さと、自分の研究を突き詰める面白さの双方を感じられるところが、都産技研の魅力です。

マテリアル技術グループ  
スガイ ミユ  
菅井 美柚 主事  
2023年入所



### 大学院博士課程 社会人入学派遣研修制度とは？

博士号取得を目指す職員の博士課程入学を支援する制度です。必要要件を満たした在籍5年以上の職員が対象です。派遣が決定した場合は、学費の半分を都産技研が補助します。この制度を利用して、多くの職員が採用後に博士号を取得しています。





## 「研究でものづくりを支える充実感」を得られる仕事がしたい

修士課程で参加した産学官連携プロジェクトが、私の進路を決めるきっかけとなりました。ミストと木陰を活用して屋外に冷却スポットを作る取り組みで、企業や自治体など約10機関が参加する中、私は実験や評価測定を担当しました。このプロジェクトを通じて、大学の研究が産業に貢献していく過程を肌で感じ、「研究でものづくりを支える充実感」が得られる仕事に就きたいと思い、都産技研に入所を決めました。

入所後は塗装分野で仕事をしています。塗装は多くの製品に関わる工程のため、お客様の業種業態もさまざま。塗膜の付着性や硬さ、屋外環境での耐候性など、試験項目も多岐に渡ります。その一つが、金属材料やその表面処理の耐食性

(耐さび性)を確かめる塩水噴霧試験です。塩水噴霧試験では、金属材料の表面に塩水を長時間噴霧し、「さび」の状態を評価します。従来の試験機では、試験中は噴霧により内部の様子が見えず、腐食の過程がわからないという課題がありました。そこで試験機メーカーと共同研究を行い注水により一定時間ごとに内部を可視化し、観察できる試験機を開発。従来の試験方法では取得できなかった、腐食の進行過程に関するデータを得ることに成功しました。この試験機は既に製品化され、都産技研の技術支援業務でも活用されています。

### My Career

2016年入所

修士課程修了後、都産技研に入所

2020年

副主任に昇任

2021年

博士号取得を決意  
大学院博士課程社会人入学派遣研修制度に応募

2022年

社会人博士課程に進学

2025年

博士課程最終年を迎え、博士号取得に向けて奮闘中

## “知りたい”を追いかけて—博士課程という選択

この塩水噴霧試験機の共同研究を通じて、さびに関する知見をさらに深めたいと考えるようになりました。「博士課程に挑戦する選択肢もあるのでは」と考える中、出身大学の恩師の退官が近く、退官前にもう一度指導を仰ぐ最後のチャンスだと思い、社会人博士課程への進学を決意しました。都産技研には博士号取得を支援する「大学院博士課程社会人入学派遣研修制度」があることも後押しになりました。この制度は、書類審査と面接を経て最終的な派遣が決定します。必要書類の中には、上司による推薦書が必要であり、また、業務の一環ですので、周囲の理解や協力は必要不可欠です。そのため、進学にあたっての業務計画を資料にまとめて上司や同

僚に丁寧に説明しました。事前に相談していたこともあり、好意的に受け止められ、無事に推薦をいただくことができました。面接では、進学を希望する大学や、現在の研究の進捗、今後の見通しなどに加えて、「博士号の取得を経て、都産技研にどのような貢献ができるのか」も問われました。

当たり前ですが、博士号得自体が「目的」ではなく、あくまで支援や研究の質を上げるための「手段」の一つだからです。現在は、都産技研の通常業務と並行して、大学院へ月1回程度赴き、実験やゼミに参加するほか、オンラインでも指導を受けています。多忙な日々ですが、隙間時間を見つけて両立を心がけています。

## 博士号取得は通過点—その先の未来のために

大学では「さび」という現象を理論付けることを目的に、シンプルな実験条件で基礎研究を行っています。大学の教授からは「研究の背景が“現場の生の声”であることが最大の強み」とよく言っていただきます。一方で、博士課程でさらに視野が広がり、「これは普段の業務に活かせるのでは」と思えることも増えてきました。レーザーを用いて噴霧の流れを可視化するなど、都産技研にはなかった発想が大学のディスカッションで生まれることもあり、日々刺激を受けているところです。

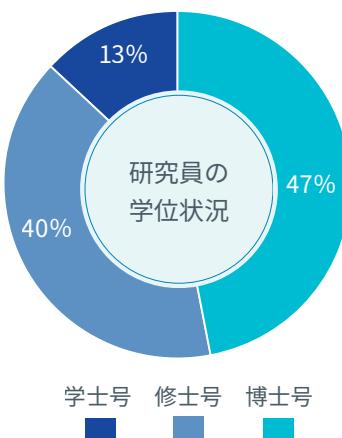
博士課程3年目を迎えて、いよいよ博士号取得に向けて論文執筆を進めなければなりません。博士号取得後は、大学院で得た知見を支援業務に還元することはもちろん、恩師から学んだ「研究者としての生き方」も実践していきたいと考えてい

ます。研究のみならず、資金の獲得や、そのためのプレゼンテーションも重要な仕事の一つ。博士課程ではこうした面でも学びになることが多く、今後は研究者としての総合力をさらに磨き、成長していきたいと考えています。

社会人博士課程の修了はゴールではなく、新たなスタートです。この経験を都産技研にどうフィードバックし、中小企業の未来にどう貢献していくか。その問いに、これからも真摯に向き合っていきます。



プロセス技術グループ  
イシダ ユウヤ  
石田 祐也 副主任  
2016年入所



2025年4月1日現在



徹底的に寄り添う  
伴走支援で課題解決に  
お客様が思い描く  
製品を実現するため

INTERVIEW

## 共同研究により生まれた他に類のない新たな技術

精密加工機を設置する際には、機器本体を水平にする「レベル出し」と呼ばれる作業が欠かせません。これまで、水準器やダイヤルゲージを使用して、作業員が声を掛け合いながら手作業でジャッキを微調整してレベル出しを行っていました。レベル出しの作業は、複数人の作業員を必要とし、1台あたり60分以上の時間がかかるため、大きな負担となっていました。この課題を解決するため、デジタル水準器と電動ジャッキを連動させ、レベル出しを自動化することで、作業時間の大幅な短縮を目指し、株式会社 Any Design と都産技研が共同研究を通じて開発したのが、日本初となる全自動・レ

ベル調整システム「AdjustMan」です。

共同研究ではAnyDesignが装置開発を進め、都産技研では安全性の評価方法や精度検証などを支援。最も苦労したのは、レベル出しを自動化するアルゴリズムの検討です。当初はデジタル水準器を3箇所に置き、精密加工機の水平を計測していましたが、精密加工機のわずかな“ねじれ”により精度が安定せず、最終的には4点計測への変更を提案しました。このようにお客様が思い描いた製品を実現するために、課題解決に徹底的に寄り添えるのが、共同研究の醍醐味だと思います。

My Career

2017年入所

2020年

2022年

2023年

2025年

民間企業や大学、  
研究機関等を経て、  
都産技研に入所

副主任に昇任

出産

育休から復帰

主任に昇任

## 長期的な伴走支援で築く技術と信頼

共同研究では、お客様とのコミュニケーションも非常に重要です。これまでデジタル精密水準器「LevelMan」や、その校正を自動で行う「CalibMan」の開発支援も同社に対して行ってきました。今回の「AdjustMan」の開発には、これまでの開発支援による技術的な蓄積だけでなく、長年の信頼関係も大きく活かされています。単発の支援にとどまらず、今回のように長期間にわたる伴走支援を通じて、お客様の成長を近くで感じられることも、この仕事の魅力です。

こうして完成した「AdjustMan」は、全自動でレベル出し

作業を行え、作業員1人で作業を完結することができます。さらに、作業時間も従来の60分以上から3分以内に大幅に短縮。展示会では大きな反響を呼び、複数のメディアにも取り上げられました。学会で研究成果を発表する機会も多く、大手測定器メーカーの方から「良い製品をつくってもらえた」と評価をいただいたことも。大手企業にも認められる実績が生まれたことは、中小企業の自信につながりますし、都産技研としても大きな成果となつたと感じています。

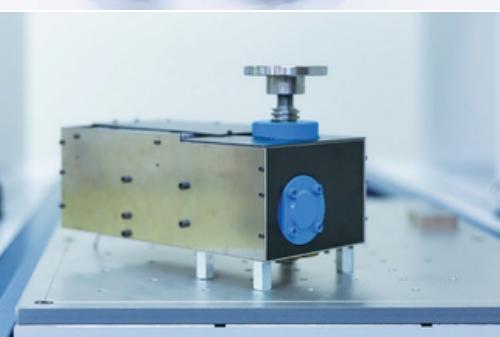
## 仕事への強い想いが大きな原動力

この一連の共同研究の期間中、出産を経験しました。2023年2月に育休から復帰。同年4月には慣らし保育のため、1か月間の育休を再取得しました。以降、家族や職場の協力を得ながら、フルタイムで勤務を続けています。

もっと育休を取得することもできましたが、復帰を急いだ理由は、仕事への強い想いがあったから。産休前もギリギリまで業務を続けていましたし、仕事が本当に好きなんです(笑)。とはいえ、以前と同じ働き方では限界があるので、作業の効率化や周りの職員との連携を意識して日々仕事に取り組んでいます。上司や同僚の協力があってこそ今の自分があると改めて実感しています。

この春には主任研究員に昇任し、リニューアルオープンする城東支所へ異動となりました。城東支所では今まで以上に周辺地域のお客さまと密接に関わることが増えると思いますので、これまで培ってきた技術を活かしながら、新たな知見も取り入れ、より多くの企業の課題解決に貢献していきたいです。

城東支所  
ミウラ ユカ  
三浦 由佳 主任  
2017年入所



家庭と  
仕事の両立  
支援制度





INTERVIEW

## 学生のときに抱いた夢がもうすぐ実現

学生時代もロボットに関連した研究開発に取り組んでいましたが、大学院での研究テーマは基礎的なもので、「自分の開発した技術が生きている間に社会実装されて、誰かの役に立つのだろうか」という葛藤がありました。そこで、大学よりも産業に近い場所で研究開発に取り組めるだけでなく、研究以外にも技術相談や依頼試験などの支援業務を行うことで、中小企業を直接支援することができる点に魅力を感じ、都産技研へ就職を決めました。

2010年に入所してから一貫してロボットの開発支援に携わっています。サービスロボットの開発に取り組む中小企業と共同で開発した日本初の屋外でも自律走行できる警備ロボットである「セキュア・トーラス」が商業施設での実証実験を実施しました。実用化に向けた最終段階に入ったことで、自分の開発した技術が社会実装される手ごたえを強く感じています。

## 開発した基盤技術が想定外の分野で開花

「セキュア・トーラス」には、私が中心となって基盤研究で開発を進めた大型ロボットベース「トーラス」を使用しています。これは、中小企業のロボット産業への参入を促進するためのプラットフォームとして、都産技研が研究開発を続けてきた「T型ロボットベース」の技術を発展させたものです。物流倉庫や工場、空港などの屋内での利用を想定しており、300kgまでの重量物を載せて自律走行することが可能で

す。また、重量物を運搬するため、安全面にも力をいれています。倒されにくく、安定しているといった特性もあります。

この特性に注目した企業から警備ロボットへの転用を提案いただき、駅構内での利用を想定した警備ロボット「ペルセウスボット」を共同で開発しました。トーラスの警備ロボットへの展開は、全く想定しておらず、自分たちだけでは決して出てこなかった発想でした。

## 強みを活かして日本初のロボットを開発

この「ペルセウスボット」を見て、声をかけてくれたのが「セキュア・トーラス」と一緒に開発することになる株式会社カンブリアン・プロジェクトです。警備する場所を屋外に広げたこれまでにない警備ロボットの開発を目指し、「中小企業の5G・IoT・ロボット普及促進事業（当時）」の公募型共同研究開発の一環として2021年度から開発を開始しました。

気温や湿度、直射日光、暗闇など、外的要因の影響を屋内よりもはるかに強く受ける屋外で自律走行し警備を行う

必要があるため、試行錯誤の連続でした。しかし、1年という短い期間で開発ができたのには、いくつかの理由があります。第一にロボットの基盤技術が都産技研にあったこと、第二に共同研究により企業と都産技研がそれぞれの技術を補完し合うことができたこと、第三に中小企業ならではの決断の速さとフットワークの軽さがあったことです。このように、それぞれの強みをうまく活かすことで大きな成果を生むことができたと感じています。

## 新たな産業を東京に根付かせるために

私が基盤研究で開発した技術が企業の目に留まり、当初は想像していなかった方向への広がりを見せていましたが、これはまだ始まりにすぎません。警備ロボット以外にも、建設現場で活躍するロボットの開発なども進んでおり、さらに広いフィールドでの活用を期待しています。ロボット産業は、まだまだ未成熟で中小企業の参入も大いに期待できる分野。引き続き、精力的に中小企業の参入を支援することで、都産技研が開発した技術を核とした新たなロボット産業を東京に根付かせていきたいと考えています。このように複数の中小企

業と一緒に技術開発や製品化に取り組めるだけでなく東京に新たな産業を創造するというスケールの大きな仕事ができる点も都産技研だからこそ味わえる醍醐味だと感じています。

※名称等はインタビュー当時のものです。

経営企画室  
マスター トシキ  
益田 俊樹 副参事  
2010年入所



### 研究員の キャリアパス

